
ハイビスカスの花

仲里しのぶ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ハイビスカスの花

【Nコード】

N4095N

【作者名】

仲里しのぶ

【あらすじ】

乙女チックな男の子マサシは、未だに元カノのことを引きずっていた。

そんな彼の誕生日に元カノからお祝いのメールが！

音信不通の彼女からの予想もしなかったメール。

そのメールから始まる彼女の本音とは・・・

6月の梅雨の夜。マサシは勉強机に置いてある小瓶を眺めていた。小瓶の中には小さなハイビスカス。星の砂に支えられた赤いハイビスカスだ。

以前から自分が結婚すると決めた女の子に、これを渡そうとマサシは考えていた。

高校生3年生の男子だったが、こういうところは乙女チックで、

「お付き合いは結婚を前提に」がモットーだった。

当然ながら、付き合う女の子にはその小瓶のハイビスカスが渡された。想い重い花である。

半年前、当時付き合い合っていたかえでにフラれ、ハイビスカスは帰ってきた。

けれども未だに納得できず、花を見つめている。

最後に言われたサヨナラを未だに引きずっているのだ。

「いつもそう言って、仲直りしてたじゃないか」

花に話しかけるマサシは寂しい。

かえでとマサシは2年付き合い合っていた。2年という長い間に、何度も別れを告げられ、何度も好きだからと別れを拒み、告白し続けた。かえでの別れ話にマサシの告白。「サヨナラ」「イヤだ、君が好きなんだ」その繰り返しだった。

けれどもこういう珍しいコミュニケーションで、二人は愛を感じていた。

かえでは二つ年上で、マサシが高校2年に進級した時かえでは大学

に進学。

マサシは、かえでに他に男ができないか心配だったが、彼女は決して他に男をつくらなかった。

別れ話は何度も出ても、互いに好きでいたのだ。

けれども別れはやってくる。

いつものようにデートの後、マサシの部屋で休んでいるときだった。かえだが、

「友達とスキー旅行行ってもいい？」

と珍しくお願い事をした。

だがその内容が、友達の男女4人で、泊りがけの旅行に行くのとこのどだった。

「本気でいつてんの？」

と冗談まじりで聞くと、

「ウソだったら言っていないし」

とサラリと答えられた。

高校2年のマサシにとって、男女4人で旅行なんて如何わしいもの以外のなんでもなかった。

まさかの公認浮気を求めてくるとは……。

自分に飽きられたのか、それとも他に好きな男ができたのか、はたまた特別な事情があったのか……

頭が真っ白になりボーっとし、気づいたら彼女は部屋から姿を消していた。

それから連絡をしても、そっけない返事ばかりで、また例の繰り返し時期に入ったなど、別れ話を覚悟していた。すると案の定、いつものごとく別れ話になったのだ。

ところが今回だけは、浮気旅行を認めるなんてできない。いつもは

穏便なマサシも、なんで行くのとイヤな顔続けた。初めての反抗に彼女は、普段よりヒートアップし訴えを拒否した。そして気づいたときには、今までと違うパターンに展開し、2人は恋人でなくなってしまった。

「はあ・・・」

ため息で小瓶が曇り、ハイビスカスの色がにじむ。

別れて半年が経つが、新しい彼女はいない。

彼女は作りたいのかえでの顔が浮かび、友達よりも深い関係に進めないのだ。

「まだまだ時間はかかりそうだな」

そんないつもの感傷に浸かっていると、携帯がそれをやめるようにと鳴り始めた。

こんな夜中に誰だろう、そう思って携帯を見ると、誕生日のお祝いメールだった。

マサシは18歳になっていた。

そんなに気を遣わなくてもいいのに、とメールの返事を打っていたら、次から次へとメールが来る。

クラスメイトや先輩、後輩、地元の友達と様々だったが、たくさん来た。

どれもみんな女の子からだった。けれどもみんな友達で、それ以上になれない。

全部のメールに返信をし終わった頃、やや遅れてお祝いメールがやってきた。かえでからだった。

ずっと連絡をとっていなかったから、マサシは驚いた。

「いまさらなんでお祝いなんて・・・」

携帯はただ光っているまま、だがマサシは徐々に嬉しくなっていた。

他のメールの返信よりも気を遣って返してみる。なんだか付き合う前のメールのようだ。

すると返事は意外と早く帰ってきて、半年前に喧嘩別れしたとは思えないほどだった。

そこから二人のメールは明け方まで続き、互いの近況や思い出話をして半年の溝を埋めた。

それはまるでドラマのように、お互い本当は好きなのに勘違いで別れた、つといった感じにも取れるほどだった。

そして驚くことに、明日もしヒマだったら会ってほしいと言われたのだった。

マサシは頭で考えるよりも先に、「いいよ」と返事をしていた。

久しぶりの再開。これは神様がくれたチャンスだ。そう思わずにいられなかった。

やっぱり自分にはかえでしかない。そう小瓶に話しかけた。

マサシはだれにでも優しく、それを女の子が自分に好意があると勘違いしてしまう。

勘違いした女の子は自然と彼を好きになり、彼はそれに気づかずまた優しさの安売り。

思わせぶりプリンスだ。

そんなプリンスに、かえでの嫉妬は増えるばかり。けれども、それを責めずに我慢していた。

それは、かえでがマサシの優しさに誰よりも惚れていて、好きだったからである。

小さな仕返しのつもりで言ったスキー旅行を、マサシがやけに怒ったことにかえでは驚いていた。

いつも気遣いで優しい彼が怒って黙りこける姿を見て、今まで自分が我慢していたのがあほらしく思えた。

マサシが女の子と仲良さげに話す姿を、かえでは嫌というほど見てきた。

ところが彼は、まだ現実を起こってもいないことに腹を立てている。理不尽だ。私がどんな気持ちで、ずっと耐えてきたのか知らないんだわ。

そして別れを決意した。

彼の優しさに惚れたのに、その優しさで別れるなんて。涙が止まらなかった。

そんなかえでに、もつと優しい人が現れた。

悲しんでいる彼女を守ってあげたいと、涙を拭いてくれた大学の先輩だ。

先輩にはマサシにはない大人の優しさがあった。

そんな先輩の優しさもあって、かえでは悲しみに負けずに新しい恋をはじめようと決意した。

それから三ヶ月。

メールを送って誘ったのは、今彼へのプレゼントの意見を聞くだけ。今の彼氏と趣味が似ているのだ。

けれども、どこかで今の幸せを見せつけたいのかもしれない。だがそのことを元彼は知らない。

待ち合わせ一時間前。

急いで家を出るマサシ。

手のひらにはいつもの小瓶。

その中には小さなハイビスカス。

小瓶という静止した空間に、ハイビスカスは花を咲かす。

（後書き）

まだまだな作者の小説ですが、読んでいただきありがとうございます。

恋の話を書くなんてと、作者恥ずかしさでいっぱいでございます。

自分の体験というかなんというか、恋っていいよねとか辛いよねとか、

そんな気持ちで書きました。

余計なお世話ではございますが、

みなさんがステキな恋をされることを願っています。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4095n/>

ハイビスカスの花

2010年10月10日04時57分発行